

コリント人への手紙第一15章13節 「死者の復活がなかったら」

1A 死者の復活の否定

- 1B コリント人の世の知恵
- 2B ギリシア人の霊肉二元論
- 3B 日本人の死を認めない死生観
- 4B 罪と死に対する敗北

2A キリストの復活

- 1B 死者の復活の希望
- 2B キリストという初穂
- 3B 信仰者の拠り所
 - 1C 世界宣教
 - 2C 生きた信仰
 - 3C 罪に対する勝利
 - 4C 眠った人との再会
 - 5C 最も祝福された者

本文

コリント人への手紙第一 15 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、コリント第一 14 章まで来ましたが、今日は午後に 15 章の前半部分を、一節ずつ見ていきます。今朝は、15 章 13 節に注目します。「もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。」

1A 死者の復活の否定

コリント人への第一の手紙も、もうすぐで終わりに近づきました。15 章では、キリストの復活について、パウロが話していますが、思い出せば 1 章で、彼はキリストの十字架について話しました。「1:18 十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」そして、手紙の終わりには、キリストのよみがえりについて教えます。

1B コリント人の世の知恵

言い換えれば、コリントの人たちに欠けていたのは、この福音に立っていなかったということでしょう。それで、いろいろな問題が起こり、その現れが肉の行いでした。仲間割れ、性的罪、偶像礼拝、礼拝における秩序の乱れなど、十字架につけられたキリストを見つめていなかったからです。十字架のことばではなく、世の知恵により頼んでいたために、それらの肉の行いが現れました。

そして、死者の復活について、コリントの人たちの中で否定した人々が一部にいました。こちらも、

世の知恵に頼っていたと言えるでしょう。世にある哲学や、一般の人々が考えるような考え方に頼っていました。そして、世にある生活に注目していたことでしょう。この世にあっての良い生活、幸せな生活、目で見えるところにしがって生きていくことです。世のいのちを愛していたので、それで、死者の復活ということについては考えないでおいている、と言えます。15章32節でパウロは、「15:32b もし死者がよみがえらないのなら、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ、明日は死ぬのだから」ということになります。」と言っています。しかし、死者の復活は、よみがえった後に、自分のからだで行ったことにしがって報いを受けるのですから、都合が悪いのです。それで、死者の復活を避けて通る傾向がありました。

2B ギリシア人の霊肉二元論

コリントの町の背景になっている考え、ギリシア人たちの考えにも、死んだ後のこと、死生観はあります。それは、霊と肉を分ける二元論です。体は元々、悪いもの、低級なものであり、精神的なこと、魂に関することが崇高とされました。ですから、死によって、この身体の束縛から、魂が自由になると考えました。ですから、身体は滅びるものであり、魂で生きるとしていました。

そこで、これまでのコリントの教会の問題を見ると、体についてのことが多かったですね。性的な罪は、自分の体に対する罪です。偶像の宮では、そこで肉を食べること、体に食べ物を入れることについてでした。彼らは、これら体に対することは、霊的なこととは関係がないとしていたのですが、大いに関係があるのです。そして、主の晩餐においては、キリストのからだをわきまえていないという問題がありましたね。それから、御霊の賜物の乱用です。教会が、キリストのからだなのだという、目に見える信者たちそのもの、目を留めることを教えていました。

そして、死者の復活はないと言っている人々が一部にいました。自分の体がどうせ死ぬのだから、今のうちに楽しんで行こうという、やはり、体に対して行うことに軽視されていたのです。彼らは、「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある。」と言っていました(6:13)。

ともすると、私たちはギリシア人でなくとも、誤った死生観を持ってしまいます。「イエス様を信じたから天国に行く切符が与えられた。」というものです。そういつて、今、自分が何をやっても関係がない。神は天に招き入れてくださる、というものです。いいえ、死者はよみがえるのです。つまり、自分が生きている時にこのからだで行ったことが、よみがえった後に報いを受けるのです。永遠のいのちのために、今の世においても私たちは生きるのです。それは、自分が死んでも、またよみがえると信じるから、与えられる確信です。

3B 日本人の死を認めない死生観

このことは、日本人の死生観にも挑戦を与えます。日本人がキリスト者になっても、どうしても、復活の信仰に生きられない、もどかしさがあります。それは、「死ぬことを知らない」ということです。

人はみな死ぬ、ということは、もちろん知っています。けれども、死ぬことは考えたくない。死んだ後の事は考えたくない、と思っています。これには理由があります。あるクリスチャンの方が、次のような説明をしていました。

「キリスト教信仰は「死と復活」なくして成り立ちません。

死があってこそそのよみがえりなのです。

しかしこの「死」という概念こそ日本人にとって最も理解しがたいことなのです。

古来から日本には「死」という概念はありませんでした。人間の肉体は朽ち果てても霊魂は生き続けると考えられています。そして霊魂は、さまようものと考えられていました。」¹

霊魂はそこら辺をさまよっている、という考えですが、そのような考えで、死というものを見つめないのです。そのために、キリストを信じるということは、自分のあり方、その生きるということに対して死ぬ、ということが、なかなか理解できません。キリスト者になることは、今の生きていることの延長で、もっと良い生き方をしていくと思っているのです。そのために、つまり人が多いのです。キリストに従うことを、今の自分のいのちによって、その頑張りによってできるなんか、絶対にできないのです。イエス様が、金持ちが神の国に入るのは、らくだが針の穴を通るよりも難しいと言われたのです。人にはできない生き方を、主は求めておられるのです。

であれば、どうすればよいのでしょうか？「自分に死んで、キリストに生きていただく」ということなのです。「ガラ 2:19b 私はキリストとともに十字架につけられました。20 もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているいのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。」私が信仰を持つ前に、宣教師の人から、はっきりと告げられたことがとても印象的でした。「クリスチャンになって、もっと良い人間になると思ったら間違いだ。もっと罪深い人間であることを知ることになる。」つまり、自分に対して日々、死んでいく生活なのです。そして、キリストが自分の内に生きていることを知っていく日々なのです。けれども、死んでよみがえるという原則において、「死なないで、生きたまます」という死生観が邪魔をして、プライドのある自分がそのまま心の中心に残ったまま、宗教的になりこそすれ、信仰によって生きることが難しくなります。

4B 罪と死に対する敗北

死者からの復活によって、罪と死に対する勝利ができるのです。イエス様が、私たちの罪のために死なれました。そして、罪の結果である死に勝利されました。そこで、主ご自身のいのちによって、死が呑み込まれました。死をもたらしている罪も呑み込み、跡形もなくなったのです。罪という毒を持っている魚を、大きな魚が呑み込んでしまったように、罪をもたらす死を、キリストの復活が呑み込んでしまったのです。そして、キリストの復活のいのちが、信じている者たちを通して、この

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=3683>

世に現れました。その復活のいのちは、後には、罪によって滅びへと向かう世界全体をも呑み込むのです。すべてが新しくされる時がきます。つまり、キリストがよみがえられたことによって、これまで罪と死の原理によって支配されていた世が、義といのちの原理に支配される新しい世界に取って替えられるようになるのです。

ですから、死者の復活を信じないということは、いつまでも、その死をもたらしている罪の支配の中に留まるということです。頑張っ、正しい生活を送ろうとしても、所詮、古い滅ぶべき、からだの中で行っていることなので、あの真面目な金持ちの青年のように、つまずいて、イエス様から離れてしまうのです。キリスト者の生活は、真面目に道徳的に生きるということではなく、道徳的なことも、正しいこともひっくるめて、それに対して死に、キリストの圧倒的な復活のいのちによって生きる、ということです。

2A キリストの復活

1B 死者の復活の希望

パウロは、ギリシアの文化や思想が濃厚な、タルソという町で生きていました。ですから、コリントの人たちが何を考えているかはよく知っていました。しかし、彼は、エルサレムで、ガマリエルの下で律法の教育を受けた、バリバリのパリサイ人です。聖書は神の啓示であり、人間の理性がそれを受け付けなくとも、そのまま神の言われていることを受け取り、信じていく姿勢でした。彼が、イエスがメシアであることを論証するために、パリサイ人としての信仰を強調しました。カイサリアで、パウロが幽閉されていた時に、彼は、ヘロデ・アグリッパ二世の前に出て弁明する機会がありました。自分がパリサイ人であることを証言し、こう言いました。「使 26:8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。」そして、イエスがよみがえられたことを証言していくのです。

2B キリストという初穂

なぜ、パウロは、コリント人たちの一部に死者の復活がないという人たちのことを深刻に考えていたのか？彼らは、イエスがよみがえったという福音を信じていました。けれども、死者の復活はないと言っていたのです。パウロは、このことは間違っているとし、「もし死者の復活がないとしたら、キリストもよみがえらなかつたでしょう。」と言ったのです。

死者の復活は、キリストのいのちにあって復活するからです。イエス様が、マルタに言われました。「ヨハ 11:25 わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」キリストご自身がよみがえり、いのちです。それで、キリストを信じる者は、キリストのいのちにあって、自分自身が死んでも生き返るのです。だから、キリストのよみがえりを信じていれば、当然、自分自身もよみがえるのです。20 節に、「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました。」とあります。キリストが、眠った者の初穂とあります。初穂とは、

これから来る収穫の初めに収穫されるものです。第一の収穫です。ですから、キリストがよみがえられたということは、その後の収穫、信じる者たちのよみがえりがあるということです。「15:23 しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。」とあります。

私たちは、自分にとって、キリストのよみがえりはどのようなものになっているのでしょうか？二千年前に、よみがえった歴史的事実とだけ受け止めていますか？それとも、今も生きているイエスになっているのでしょうか？「ロマ 6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」バプテスマを受けたということは、今のいのちが、よみがえりのキリストにあって歩むことを表明したに他なりません。そして、この方がよみがえられたように、自分もよみがえるのだという希望を抱くことです。「6:5 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」

3B 信仰者の拠り所

このようにして、キリストの復活は信者の拠り所となっています。パウロは、コリントの人びとの一部が死者の復活をないというならば、キリストのよみがえりもないということになると話しました。そして、もしキリストのよみがえりがないのであれば、このようになると言って、14 節から、すべてが空しくなることを話しています。14 節では、福音宣教が空しいものになり、私たちは偽りの証言をしたことになると話しています。17 節には、私たちの信仰に実質がなくなり空しいものになり、私たちは未だ、罪の中にあると話しています。18 節では、すでに信仰をもって死んでいった人が、もう二度と帰ってこない、滅びているということを話しています。そして 19 節で、この地上のいのちだけであれば、私たちこそが最も哀れであると言っています。そうですね、この世においては、キリストのゆえにいのちを捨てる者ですが、それはまことのいのちにあずかるためです。死者の復活を信じないならば、ただ捨てているだけであり、意味もなく犠牲を払っているのであり、全く哀れな者です。

しかし、キリストはよみがえらえました。つまり、これらのことが、すべて価値あること、報いのあることなのだという事です。

1C 世界宣教

キリストがよみがえられたからこそ、福音宣教をする意味があります。この方がよみがえられたのですから、この方を信じることによって、生きる望みを人々が抱くことができます。だから、福音をどんな犠牲を払ってでも、語る価値があるのです。

2C 生きた信仰

キリストがよみがえらえたからこそ、生きた信仰になります。昔、死んでしまった人を思い出しな

がら生きるのではなく、今生きている方、そして、やがて来られる方を信じています。「Ⅰペテ 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちに新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」

3C 罪に対する勝利

そして、キリストがよみがえらえたので、罪の中に留まることはありません。「ロマ 6:7-8 死んだ者は、罪から解放されているのです。8 私たちがキリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きることにもなる、と私たちは信じています。」

4C 眠った人との再会

そして、キリストがよみがえられたことによって、信じて先に死んでいった人、眠った人々と再会することができます。「Ⅰテサ 4:16-17 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」

5C 最も祝福された者

そして、自分は、この地上において、最も哀れな者ではなく、最も祝福された者です。たとえ、地上でのいのちが哀れに見えたとしても、生きたキリストがおられるので、実はそうではありません。「Ⅱコリ 4:8-10 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです。」

どうでしょうか？キリストの復活によって、これだけ変わるのです。そして、死者の復活を信じているから、キリストのいのちにあって今を生きているのです。世の常識や、理屈によって、キリストを過去の人物に押し込んではいけません。この方が死んで、よみがえり、今も生きておられます。主はアジアにある七つの教会に語られるにあたって、こう言われました。「黙 1:17b-18 わたしは初めであり、終わりであり、18 生きている者である。わたしは死んだが、見よ、世々限りなく生きている。また、死とよみの鍵を持っている。」

https://www.blueletterbible.org/Comm/smith_chuck/SermonNotes_1Cr/1Cr_15.cfm

第一の手紙が、十字架につけられたキリストに始まり、キリストの復活に終わるということがとても興味深い。十字架に付けられたキリストではなく、世の知恵を求めたコリントの人々。彼らは、死者の復活をも否定する人々がいた。ギリシア人の考えでは、からだは本質的に悪であり、魂が体から出ていくことが大事だと考えた。これがキリスト教会の中にも入って来る。死んだら、魂が天に入る。けれども、今、からだを持っているように、からだをもって復活することを否定したのだ。世の知恵に頼っているためだ。

世にあるいのちだけが意味があるもので、今の生活が楽しければよい、幸せであればよいという考えで、聖書を読んで行けば、都合の悪い教えが出てくる。それが、「死者の復活」である。死んで、よみがえり、そこで生きていたことについての報いを受ける。

<http://www.logos-ministries.org/blog/?p=3683>

キリスト教信仰は「死と復活」なくして成り立ちません。

死があってこそよみがえりなのです。

しかしこの「死」という概念こそ日本人にとって最も理解しがたいことなのです。

古来から日本には「死」という概念はありませんでした。人間の肉体は朽ち果てても靈魂は生き続けると考えられています。そして靈魂は、さまようものと考えられていました。

15:17. Third, the Corinthians' salvation would be only a state of mind with no correspondence to reality. Their **faith** would be **futile** (*mataia*, "without results"; cf. *kenē*, "empty," in vv. 10, 14, *eikē*, "without cause" or "without success," v. 2). The Resurrection was God's validation that the redemption paid by Christ on the cross was accepted (Rom. 4:25). Without the Resurrection there could be no certainty of atonement and the Corinthians would remain in a state of alienation and sin.²

² Lowery, D. K. (1985). [1 Corinthians](#). In J. F. Walvoord & R. B. Zuck (Eds.), *The Bible Knowledge Commentary: An Exposition of the Scriptures* (Vol. 2, p. 543). Victor Books.